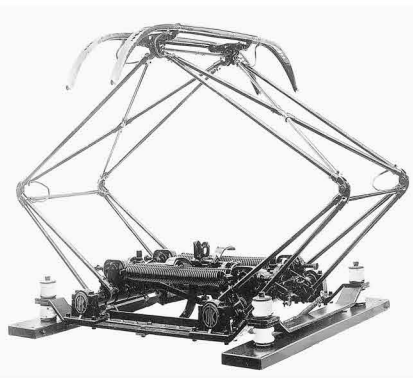
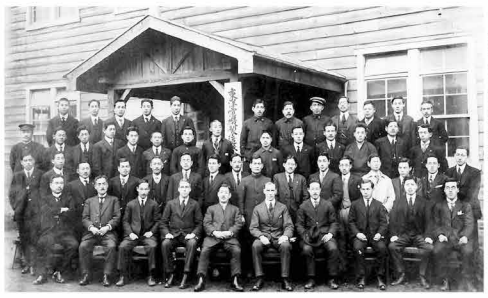


初期の国産パンタグラフ。ひし形とシングルアームという点以外に現代と大きな違いはなく、鉄道事業者に高評価を得て国内シェアの大半を占めた



横浜工場での英国人技術者との集合写真。初代の渡邊社長が留学した英国から、最高レベルの技術者と技術を迎え入れた

創立当時の横浜工場（横浜市保土ケ谷区）。横浜に生産拠点を構えたのは横浜港が当時、国内随一の貿易港だったため

鉄道車両用 電機品が基軸

東洋電機製造

〝技術の東洋〟として成長続ける

次の100年へ

東洋電機製造が1918年（大正7年）の創業からきょう20日で100周年を迎えた。大正年間の電気鉄道れい明期、海外から輸入していた主電動機（モーター）、制御装置、パンタグラフなどの鉄道車両用電機品を国産化する専業メーカーとして設立。現在は鉄道車両用電機品を基軸に、一般産業用電機品にも進出する。新しい「滋賀竜王製作所」も今月全面稼働を始めたばかり。「社員の卓越した技術こそ当社最大の財産で、今後も〝技術の東洋〟として成長を続ける」（5月16日の100周年記念祝賀会での寺島憲造社長のあいさつから）同社の過去、現在、未来を概観した。（上里　夏生記者）

会社設立は1918年（大正7年）。富山県で5年（明治28年）の京都は第1次世界大戦が終結した年だ。鉄道は東海道線、山陽線といった幹線が概成。大量高速輸送機関の有用性が認められ、全国各地に鉄道整備の流れが広がっていった。

〝日本土木史の父〟が創業

どんな企業にも創業の地を持ち合わせていたからパイオニアが存在する。技術提携した英国の学博士の渡邊嘉一〝日本土木史の父〟と呼ばれる逸材で、英国で橋梁設計などに携わった。帰国後、日本土木の技師部長として京阪電気鉄道、京王電気軌道などの建設・経営に携わるうち、国産電機品の必要性を認識し、自らが初代社長となって東洋電機製造を設立した。

土木技術者が電機品メーカー創業という、現代風に言えば若干のミスマッチは、何より渡邊が技術を俯瞰（ふかん）する経営者としての大局的見で挑戦や進化を続ける。

社会インフラ発展に貢献

東洋電機製造は進化を止めない。生産品は創業時の鉄道車両用電機品を引き継ぐ「交通インフラ関連」、自動車開発用試験装置、主制御装置、補助機器、発電・インフラシステムなどに代表される「一般産業関連」が2本柱で、高度な公共性・公益性を持つのが特徴。

高い技術力を駆使した〝ものづくり〟で、産業の発展や快適な暮らしを実現し続けるのが100年企業・東洋電機製造の実像だ。

鉄道車両用電機品では、集電装置（パンタグラフ）、主電動機、歯車装置、主制御装置、補助電源装置（SIV）などが同社製で、電気鉄道の心臓部を支える。情報機器（車掌用携帯端末、複合機）、クラウド型遠隔監視システムをはじめとするサービス機器に領域を広げる。

自動車試験装置が得意

一般産業用では自動車関連で、精度で再現性に優れたテストを可能とする。

今後は次世代の電気自動車（EV）、自動運転といった最新技術に対応する試験システムに注力する。創業時から続く「東洋」の社名に象徴されるように、活躍の舞台は国内にとどまらずアジア、さらには世界に広がる。

主な採用事例は米国・ロサンゼルスとダラスのLRV（次世代型路面電車用車両）、中国の北京地下鉄と成都地下鉄の複数路線など。

昨年は成都に都市交通向けパンタグラフを製造・販売する海外現地法人を設立。日本の鉄道技術の海外展開は経済の成長戦略の柱で、〝世界のトーヨー〟への飛躍が続く。

稼働を始めた新工場「滋賀竜王製作所」。新興の工業団地への進出第1号で最新設備を備える。

一般産業用 電機品にも進出

新しい製作所が全面稼働

次の100年に歩み出した東洋電機製造の新時代を象徴するのが、滋賀県竜王町の「滋賀竜王製作所」だ。キーワードは「生産体制の再構築」。新しい製作所は一般産業関連を主力とするが、整備効果は交通インフラ関連にも波及する。

東洋電機製造は横浜製作所、旧・滋賀工場（滋賀県守山市）の2つの生産拠点を持ち、一般産業は横浜、滋賀（守山）に集約して、業務の効率化や生産性向上を図る。

〝鉄道車両用電機品の東洋〟の立ち位置は過去、現在、未来を通じ変わらないものの、企業の安定成長には一般産業関連の強化が欠かせない。竜王